子どもの確かな学びを促す地域教育の在り方
―地域と学校パートナーシップ事業の効果的な運用について―

U17C215A　高見　潤

1．課題設定とその背景

1）学校に求められる社会に開かれた教育課程

中央教育審議会は、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（平成27年）を答申した。その中で、「未来を創り出す子供たちの成長のために、学校のみならず、地域住民や保護者等も含め、国民一人一人が教育の当事者となり、社会総掛かりでの教育の実現を図ることを通じ、新たな地域社会を創り出し、生涯学習社会の実現を果たしていく」という理念を打ち出した。この理念の実現のために、学校には、地域と共に子どもの成長を担い、子どもの教育環境の充実や地域の教育力の向上を目指す「社会に開かれた教育課程」の編成が求められている。

文部科学省からも、「『次世代の学校・地域』創生プラン　～学校と地域の一体改革による地域創生～」（平成28年）、「新しい学習指導要領の考え方　―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ―」（平成29年）が公表された。これらの中で、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有すること、それぞれの学校で必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にすること、等の社会に開かれた教育課程の編成と確かな学びの実現を重視した改訂のポイントが示された。

2）学校課題と本研究の主旨

これからは、学校と地域が連携して子どもへの教育を共に推進していく必要がある。しかし、筆者が勤務するA小学校では、子どもも職員も地域と十分なつながりがあるとは言えない実態がある。また、地域と関わる意図が明確でない学習もある。地域教育のためにボランティアから支援を受ける際、これまで、担任と学習支援ボランティア（以下、学習支援VO）の間で授業のねらいについて、事前の情報交換や共有はあまりされてこなかった。

これらの課題を解決していくためには、職員が地域と連携・協働を図り、学習支援VOの力を借りる仕組みが必要である。地域学習を行う総合的な学習の時間で子どもたちが身に付けるべき資質・能力を設定し、獲得できるようにしていくことが「社会に開かれた教育課程」と「子どもたちの確かな学び」の実現に繋がると考える。

『小学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編』（平成29年）に、「子どもたちが、地域の特色に応じた課題を解決するために、地域の伝統や文化に触れたり、その継承に力を注ぐ人々、地域の人と交流したりすることで、課題の解決に取り組んだことへの自信や自尊感情の高まりを築く」とある。つまり、総合的な学習の時間に取り組むことで地域との接点ができ、これが「地域の中の自分」という見方に繋がっていく。この見方は、将来的に一人一人のアイデンティティー（自分らしさ）を確立すると同時に、子どもの未来の選択の可能性を広げることになると考える。

そのために、本研究では、A小学校の地域教育コーディネーター（以下、地域教育CO）と連携しながら実施する学習を取り上げ、子どもの確かな学びを促す視点から地域との連携の在り方について再考する。２年生の生活科では、「好きな方面探検」「インタビュー町探検」「買い物町探検」の３つの実践から学習支援VOとの効果的な連携の方法について考える。さらに、５年生の総合的な学習の時間では、効果的な連携をもとにした「子どもの確かな学び」について検討する。

2．２年生の生活科の実践から

1）「好きな方面探検」での学習支援

平成29年５月、子どもたちが学校を起点に行きたい方面を決めて探索し、地域の特徴を見付ける「好

きな方面探検」を実施した。授業者は地域教育 CO に依頼し、学習支援 VO から活動に同行してもらった。

子どもたちには地域の特徴や様子をよく観察する姿が見られた。学習支援 VO からは、「実際に歩いてみて交通量の多さに驚きました。」「とにかく元気に歩いていました。楽しかったです。」等の、安全管理が徹底できたことへの感想が寄せられたが、学習のねらいに即したものは見られなかった。

2）「インタビュー町探検」での学習支援

平成 29 年 6 月、子どもたちが「好きな方面探検」で見付けた自分の関心のある場所や店でインタビューをし、他者との関わりを通じて地域を詳しく知る活動を行った。授業者は学習支援 VO からも積極的に子どもの学習活動に関わってもらいたいと考え、事前に活動内容や具体的な子どもたちの行動を口頭で伝え、インタビュー町探検を行った。

活動後の子どもたちの振り返りには、「店や町の人の話をしっかり聞けた」等があり、学習のねらいは達成された。一方、学習支援 VO に対する感想では、「安全に見守ってくれてよかった」51.6%、「(学習支援 VO のおかげで) よく考えて勉強できた」27.9%であった。子どもたちが、安全面での支援だけでなく、学習面への支援を実感したことが確認できた。

3）取組の成果と考察

事前に活動の趣旨を説明することによって、学習支援 VO から「インタビューする相手ともスムーズにコミュニケーションがとれていました。」「初めて会った大人の話を最後まで聴くのは難しいですが、2 年生なりにしっかりしていました。」等のねらいに正対した感想が増えた。これは、学習支援 VO が子どもの学習を見取る視点を持てるようになったためと考える。事前に学習の目的・内容・方法を伝えることで、学習支援 VO が学習のねらいを意識して子どもとより深く関わり、子どもを理解しようとする姿勢が見られるようになった。

4）「プランチェックカード」と「ネットワーク通信」作成による共通理解の促進

「買い物町探検」では、学習のねらいや目指す子どもの姿を記載した「プランチェックカード」を作成した。これを事前に学習支援 VO に示すことにより、「学習の目的」や「授業の内容」「その活動によってどのような子どもの育成を目指すのか」といった点について確実に共有できると考えた。さらに、より主体的に学習活動に関わってもらうようにするために、「目指す子どもの姿」が見られたかどうかを 4 段階の数値や記述で評価してもらうようにした。そして、その姿が見られるように声を掛けたり補助したりして応援したりするように依頼することにした。

活動を終えると、子どもにも大人にも様々な変化が生じる。教師と学習支援 VO がそれぞれの思いを持って子どもたちの学習に携わったり、様々な立場の人の思いが学習の中で実現したりしている。これらの様子を、保護者や地域の人が共有することができるように、学習を振り返る「ネットワーク通信」を作成し、配付することにした。

5）「買い物町探検」での学習支援

平成 29 年 11 月、商店街へ出掛けて店の人と関わりながら家族と決めた買い物をする「買い物町探検」を行った。プランチェックカードを活用することによって、学習支援 VO が学習に積極的に関与し、子ども同士の関わりも数多く見られた。

活動後の子どもへのアンケートで「ボランティアが来てくれて良かったことは何ですか」の問いに、自由記述した回答をキーワード群ごとにカウントした。すると、「よく考えて勉強できた」という内容に関する割合は、前回の「インタビュー町探検」の 27.9%から、今回は 52.6%に向上した（図 1）。また、「声を掛けてもらったよさ」については、20 ポイント以上の向上が見られた。

学習支援 VO は、「目指す子どもの姿」の実現のために買い物の様子を見守ったり自ら子どもに助言したりしていた。また、学習支援 VO は、プランチェックカードを用いて「目指す子どもの姿」に沿って実際の子どもの姿を評価し、具体的な様子で振り返り

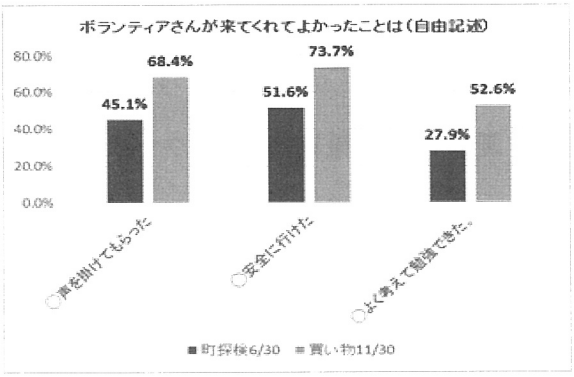

図1　子どもたちのボランティアに対する意識

を書いてくれた。これは、学習支援VOが「メンター」として機能していたからと言えるだろう。プランチェックカードの活用で、学習支援VOとより効果的な連携を図ることができた。

3．プランチェックカード、ネットワーク通信の効果

各学年の地域教育担当と相談し、全学年で「プランチェックカード」「ネットワーク通信」の取組を導入した。すると、それぞれの活動に参加した学習支援VOから、「学習の目的が明確になった」(32.4%)、「何を手伝えばよいか明確になった」(22.1%)という肯定的な意見が挙げられた（図２）。「『目指す子どもの姿』があり、中身の濃い、やりがいのあるボランティアができて良かった」「他の参加者の方が自分と違うことを思っていて、他の考えを知ることができて良かった」という、これまでのボランティア活動では見られなかった感想を挙げる人もいた。

また、一般保護者からは、「ネットワーク通信」によるメリットとして、「学習内容がよく分かる」ことや(73.9%)、「教師以外の大人の視点で活動を振り返っている」こと（64.7%）を挙げた人が多かった。実際の子どもの姿で語られたことが、保護者一人一人のニーズに応える価値あるものになったと考える。

これまでの実践から、地域教育では、子どもの学びに関わろうとする大人たちが連携する「横のつながり」と、子ども一人一人が「よく勉強できた」と実感して成長していく「縦のつながり」の２つのつながりが重要であることが分かってきた。

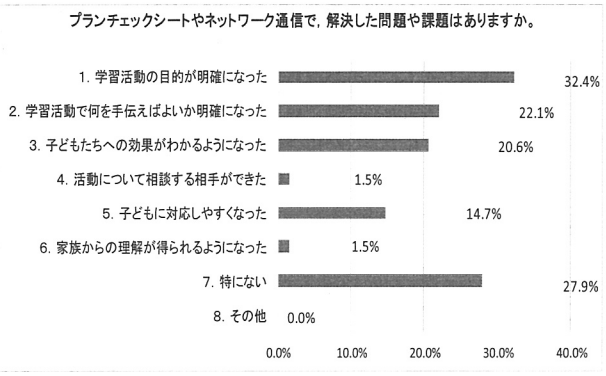

図２　学習支援VOへのアンケート

4．子どもを支える「横のつながり」

1）スタートアップ・ミーティングの実施

「学校だけ」「保護者だけ」といった単体での子どもへの関わりではなく、教師が中心になりながら学校と地域がチームになって対応する「横のつながり」を構築する必要性を感じた。そこで、平成30年５月、様々な立場の人たちが集まり、A小学校の地域教育の在り方や子どもに身に付けさせたい力について語り合う「スタートアップ・ミーティング」を計画した。地域教育について話し合う中で、地域の人や学習支援VOの思いを教職員が聞き取ったり、学校が考えていることや関わっている教職員を知ってもらったりすることができると考えた。

スタートアップ・ミーティングでは、KJ法による意見交換を行い、一人一人が、前年度のボランティア参加の際に気付いたことや日常的に考えていること等を付箋紙に書き出した。多くのグループで「学習や生活の面における現在の子どもたちについて」「保護者として望む『地域教育で目指す子どもの姿』」等の話題が上がった。それを、模造紙に貼りながらグループ内で話し合い、最後に全体共有を図った。

2）スタートアップ・ミーティングから見るボランティアの主体性

スタートアップ・ミーティング終了後、「自分以外の他のボランティアの人の思いを知ることができてよかった」「参考になった」と回答した人は84.6%、「自分の考えを伝えられてよかった」と回答した人は53.8%（複数回答を含む）で、大勢の人がミーティングの意義を理解し、参加を肯定的に受け止めていた。

5．子ども自身の成長としての「縦のつながり」

1）目標･方法･評価の設定

２年生生活科の実践では、子どもたちが何をもって「よく勉強できた」と答えたのか不明瞭な部分も多かった。子どもたちに身に付けさせる力を、総合的な学習の時間で育成すべき資質・能力の三つの柱に沿って明確に示す必要がある。

そこで、「生活･総合的な学習ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（平成28年８月）を受け、「『自分自身に関すること』としては、主体性、自己理解、内面化の３つの観点、『他者や社会との関わりに関すること』としては、協同性、他者理解、社会参画（社会貢献）の３つの観点を、学びに向かう力として設定する。また、評価に関しては、これら６つの観点を『主体的に学習に取り組む態度』として見取っていく。

2）評価の方法

子どもが自己評価できるようにするために、項目を細かく設定し、子ども自身が伸びを実感できるようにする必要がある。そこで、成長を視覚的に実感できるようにするために「自己モニタリングカード」を開発した（図３）。指標に基づき、自分の成長を自己評価させ、数値化する。それをグラフ化して自分の成長を振り返り、さらなる目標を設定させる。

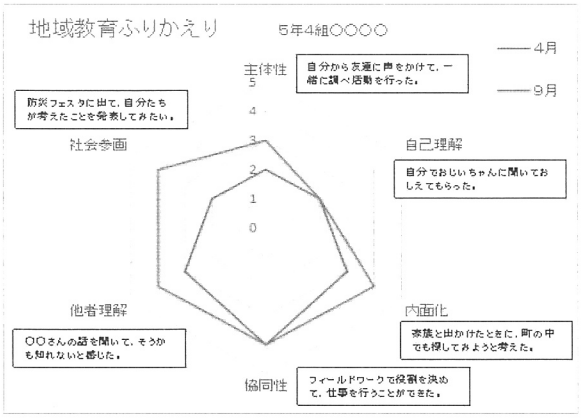

図３　子どもの自己モニタリングカード（例）

６．５年生の総合的な学習の時間の実践から

1）学習支援 VO との連携・協働

平成30年５月、５年生の総合的な学習の時間で、「油断大敵」「用意周到」「沈着機敏」「臨機応変」の４つの観点を重視した防災学習を計画した。この中で、実際に地域の危険箇所を探すフィールドワークを行ったり、安全マップを作成して地域の防災フェスタで紹介したりする活動を組織した。フィールドワークには保護者やコミュニティ協議会等26名の学習支援 VO から同行してもらった。事前にこの活動で目指す姿をプランチェックカードで伝えたところ、地域の危険箇所について、子どもたちが気付かないような点について声を掛けたり、子どもたちが主体的に活動できるように後ろから見守ったりする姿が見られた。

2）自己モニタリングカードによる評価

子どもたちが、自身の「縦のつながり」（自らの成長）を実感するのは難しい。そこで、フィールドワーク後と防災フェスタ発表後の計２回、子どもたちに自己評価をさせた。グラフ化し、比較させることで、自身の成長を感じられるようにした。１回目の自己評価の後、２回目に向けて自身の力をさらに伸ばしそうと意欲的に取り組む姿が見られた。

それぞれの観点に関する自己評価の値は、７月より 10 月の数値の方が高くなった（表１）。しかし、「内面化」「社会参画（社会貢献）」の変化は少なかった。より深く自分事として学んだり、より広く社会のために人と関わったりしようとする力の習得を実感するのは難しいということが分かった。関連する活動が少なかったことや発達段階としてまだ経験値が不十分という背景と関係があると推測される。７月と10月の二つのグラフを見比べながら、６つの観点で自己の伸びを実感したり、今後への新たな課題を持ったりする振り返りを書いた子は 77.4%だった。自分の成長を客観的に理解し、さらなる目標設定に効果を上げることができた。

表１　自己モニタリング（評価）による学びの実感の変容

学びに向かう力	7月（単元の中）	10月（終末）
主体性	3.92	4.29***
自己理解	3.79	4.27***
内面化	3.72	3.94*
協同性・協働性	3.91	4.36***
他者理解	3.85	4.36***
社会参画・社会貢献	3.52	4.05***

* $p<0.05$、** $P<0.01$、*** $P<0.005$

７．まとめ

本研究で、学校と地域が「目指す子どもの姿」や「学習のねらい」についての考えを共有し、チームとして機能することで、子どもが豊かに学べるようになることが分かった。さらに、子どもが自身の学びの道筋を把握できるようになると、一人一人が自己の成長を実感できるようになることも分かってきた。学習支援 VO 自身が、学習に主体的に関わることで、子どもと共に学ぼうとする意欲を醸成することに繋がることも見えてきた。

今回、地域を題材にした実践研究を経て、学校と地域の相互理解・協働体制は、縦と横の２つのつながりが重要であるとの知見を得た。地域教育において、この２つのつながりを相乗的に高めていくことが、社会に開かれた教育課程を実現させ、子どもの確かな学びを促し、よりよい社会を創ることになると考える。